

偶然性の精神病理

木村 敏

0. 序

「人間の心が生命現象の中で一体どのような位置を占めるのか」というのは非常に興味深い問題であるが、現在のところ、生命科学あるいは一般に自然科学が何らかの説明を与えたとは言い難い。心の問題を研究対象としてさえ取り上げていないという現状では、生命科学が満足 of いくものであるなどとは、とても言えないのではないのではないだろうか。

精神分裂病は「自己の存在」に疑義を向けている状態であるが、「自己」を考察の対象とする時には出発点として「自己言及性」ということを考慮しなければならない(ハイデッガー: ≪人間は、みずからの存在可能に関心を向けているものである≫)。さて、この「自己の存在」ということを考える時、日本語には存在を表す動詞として「ある」と「いる」の二つが存在するという興味深いことに気付く。アルは「物事の出現・存在についての認識によって規定される」のに対し、イルは「居る」で「元来動くはずの動物が動かずにじっとしている」の意である。人間はイルことにより、その居場所を「うち」(内、家)として設立し、偶然性の領域である「そと」と区別するのである。

1. 自己と偶然性

[症例 1] 35 歳の独身男性。一流大学に入学、通学はしたが単位を取らずに自然退学。

≪自分が二人いるのではないか。…別の自分も確率的に存在しているのではないか。…鏡を見る時、後ろから誰かに見られている視線を感じて金縛りのように立ちすくむ。…ある確率ではすべてが可能なのに、いまここにいる私は一つに決まっているのが不思議。調子が悪くなると、鏡の中だけではなく現実の他人との区別もなくなってしまう。…自分はあまり積極的に入学を望んでいなかったのに、不合格でうなだれている親子を見て責められている気持ちになり、海に飛び込んで死のうと思った。…≫(患者の言葉より)

この患者の訴えの中で重要なのは、「自己の存在の偶然性」に言及しているということである。ここで、「個体は多数個体のうちの確率的な $1/n$ である」という場合の「アルの次元における自己」と、唯一の主体的自己としての「イルの次元における自己」という、二通りの自己が存在することに注意しなければならない。

この患者は、「必然的に自己が存在すること(イルの次元での自己)」について重大な罪意識を持っているようだ。「イルの必然は他のイルを排除すること」であるから、この患者においては「イルの重荷 = 罪」となる。そこで、患者は自らのイルを確率的なアルに変えることによって、この罪意識から逃れようとする。その結果「自己の主体性の成立不全」⇒「精神分裂病」という図式をたどったと考えられる。

また、鏡に映った自分に対する反応は非常に興味深いものがある。この患者においては、鏡を見ている actual な自己と鏡に映る自己の虚像の区別が、単なる確率の問題になってしまっている。すなわち、actual/virtual という軸で考えるべき対象を、real/possible という軸へと変換して考えているのである。

自己は身体を所有して real にアルところの偶然的存在者だが、その身体を自ら生きることによって、actual にイルところの必然的主体とならねばならない。ニーチェによると、《生成に存在の性格を刻印すること—これが力への最高の意志である》《認識と生成は相互に排除しあう…[認識を可能にするために] 一種の生成自身が存在者という錯誤を作り上げなくてはならぬ》すなわち、生命というのは本来認識不可能なもの(生成)であるが「力への意志」が認識対象としての物質的生命(存在者)を産出するとし、存在者としての生命は錯誤にすぎないという。ハイデッガーは存在論的差異という言葉を使って、認識対象としての存在者と認識不可能な存在自身との違いを表した。また、キルケゴールは《自己とは関係が関係それ自身と関係するような関係のことである》といい、自己を自己言及的な「関係」としてとらえようとした。

このように、我々が認識し思考の対象としているもののほかに、本来的に認識不可能なものが存在する。この二つの存在をわかりやすくいうと、モノとコトの違いということになる。生命は本来コト的な存在であり、モノとして対象化することは出来ない。生命をコト的なままで研究しようとする場合、研究対象として対象化した瞬間にモノとしての生命に変わってしまうのである。

2. 進化論と集団

ダーウィンの進化論は、淘汰による選択の結果として種を変化させるという図式で説明する。ところが動物の行動は非常に多様であり、簡単な説明ですまされるものではない。例えば、「働き蜂」や「働きアリ」は利他的・利種的な行動をとるものもあれば、「サルの子殺し」に見られるような、オス個体の利己的・利個的な行動も報告されている。

一方、個体とは何か、個体という概念はどこまで有効かということについては、よくわかっていないのである。例えばサンゴのような集合体の存在などを考えると、個体と種との区別はかなり曖昧なものであることがわかる。また、精神活動においても、例えば全体主義国家などのように集団的な精神行動というものが存在する場合がある。「医師」と「患者」という二人の集団においても、一体感の持てる相手とそうでない相手が存在するように、この時の一体感という意識は個人の精神行動であるのかどうか微妙である。

進化という問題を考えるとき、ドーキンスの「利己的遺伝子」も非常に興味深い考え方を提示してくれるが、今西進化論の《種が変わるべくして変わる》という「種の主体性・

集団の意志」のようなものを重要と考えたい。このような考え方に立つと、「突然変異」⇒「自然選択」というダーウィンの進化的な進化の図式は簡単には納得しがたいものがある。

3. 界面現象と時間

「私の自己は私の中にある」というとらえかたは誤りである。主体(自己)は、「モノとしての自己である一個の有機体」と「環境というソトの世界」の間に発生する一種の界面現象であると考えるとよい。界面現象には、ウチとソトとの間に発生する空間的なものと、ウチとウチの間に発生する内在的・時間的なものがある。

[症例 2] 44 歳の独身男性。

「… タイミングがうまくとれない。父にタイミングを狂わされる。父にタイミングで負けている。少しでも間があくとつけこまれる。人と話していても間がもてない。全体の雰囲気より早めに出てしまう。いつもフライングをしている感じで、リズムカルに行かない。… しゃべろうとするとフツとそれを押さえるので、そのうちに話題が変わってタイミングがずれる。… 」（患者の言葉より）

「タイミング」というのは、相手も自分も共に動いているときに、その行動がどこかで出会うことである。一般に分裂病患者は「タイミングがとれない」、「タイミングで人に負ける」といった訴えをすることが多く、あせったり、考えが先走るといったことになりやすい。これは、彼らの意識が現在に落ち着けず未来の方を向いてしまっていることによる。西田の言うところの「行為的直感」（「タイミング」のような「認識で見て取れないもの」を理解する能力）を持ちうるためには、ヴァイツゼッカー的主体がはたらいしていることが必要である。すなわち、分裂病患者が「タイミング」に言及することが多いのは彼らの actuality がはっきりしていないことが原因であると考えられる。

[付記]

以上の講演を受けて、30 分余りにわたって討論が行われた。ここでは、代表的なものについて箇条書きにすることにより、簡単に内容を紹介する。

- 自己の集まりである社会にも「界面」は存在しているのであるから、社会集団にもある種の「自己」は存在すると考えてよいのではないだろうか。
- 自然科学は一般にモノを扱うが、その中から生まれる「法則」はコト的なモノである。すなわち、認識不可能な生成としての生命をコト₁ とすると、自然法則はコト₂ とでも分類すべきものであると考えられるが、ひとたび自然法則として対象化してしまうと、これは単なるモノになってしまうのである。
- 「脳の各細胞がどう動いているのかを知る」ことと、「脳が何をしているのかを理解する」ことの間には大きな隔りがある。「脳科学は科学でない」といわれるが、「モノの奥にコトとしての脳がある」ということを自覚しておく必要があるのではないか。